日本保育学会公式シンボルマーク

日本保育学会会報

2010年5月1日　発行
編集・発行　一般社団法人
日本保育学会
編集責任者　戸田雅美

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B,Rロジェ T-1
Tel 03-3234-1410 Fax 03-3234-1414
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsrec/index.html

●第147号●

一般社団法人 日本保育学会の出発にあたって

会長　秋田喜代美

日本保育学会は2010年4月1日より、法律に則って登記された一般社団法人となりました。正式名称は、「一般社団法人 日本保育学会」です。学会誌や大会論文要旨集、HP、封筒等の学会名やロゴもすべてこの名称のものに変わりました。

日本保育学会はこれまでも、日本学術会議に登録認定された学術団体ではありましたが、一般社団法人化により社会的に公式認知された法人団体となります。これまでは学会財産も、会長個人名での預貯金にせざるを得ませんでしたが、団体名義となりました。会員の皆さんは、法人の定款上は法律に則って「社員」という名称となり、大会時の総会も「社員総会」と呼ばれるよう変更になります。けれどもその変更で会員の権利等に不利益が生じることはなんらありません。もちろん、諸規程等の変更も必要となりました。一般社団法人化が昨年総会で承認されて以後、組織検討委員会を中心に諸規程改定および大会運営や職員就業に関する規程・細則等の整備作業を進め、常任理事（4月以後は理事と呼ばれます。これまでの理事は評議員となります）会で審議を行ってきました。「日本保育学会会則」は「一般社団法人 日本保育学会定款」となり、この定款に基づき「日本保育学会役員選挙細則」も「一般社団法人 日本保育学会役員選挙細則」と変更となり、役員選挙方法も変わります。またこの機会に「一般社団法人 日本保育学会役員規程」や大会発表等についての諸規程細則も明確にしました。これらの変更の詳細は、今後HPや会員名簿に記載される規程・細則をご覧ください。

またこの出発に際し、各地方区ブロックでの会員の方々の研究交流のより一層の活性化を願って、新たな大会運営方法に変えていくことになりました。これまでは、大会実行委員会を引き受けてくださる大学や地域を3年前に募り、名乗り出られる大学がない時には、会長が地域を勘案してお願いにあがって引き受けていただき、2年前に決定する形式で進められてきました。しかし、大会参加者数の増大に伴い、この方法も難しくなってきました。そこで、会員皆の責任で各地方で大会を順に運営していくという方向性を明確にし、6地方区ブロックによるローテーション制度を導入することになりました。ローテーションは、10年間で1サイクルです。会員数に応じて、関東ブロックが3回、近畿ブロックと中部ブロックが2回、他3ブロックが1回の割合になります。大会をローテーションでの運営とすること、およびその順序を記載した大会実行委員会規程およびその細則も、2月の常任理事会で承認されました。今後は各ブロックで選出理事を中心に責任を持って大会場所等を決め運営していくこととなります。運営方法は2012年から実施されます。各ブロックが大会2年前から講演会やシンポジウムなどを企画実施して相互の研究交流がより一層できるように財政支援をしながら、大会運営ができるようにしていく予定です。

また、保育学研究における不採択論文に対して不採択理由を付して返却することが、本年1月締め切りの投稿論文から実施されることになりました。今年は編集常任委員の尽力によりそれが可能となりましたが、次年度以後は編集常任委員数や審査方法などのシステムを見直すことで、この方法をより安定化していく予定です。また、『保育学研究倫理ガイドブック』も5月1日に刊行となります。倫理綱領は学会会員が共有する活動の精神を示す指針です。

これら組織基盤を固めた新たな出発により、本学会が60年の伝統を受け継ぎつつ日本の保育学研究の未来を創出していく場となっていくことを願っています。

●特集● 今子育ての場で求められていること

現在、子育てをめぐる議論が活発に行われている。保育学会の会員である私たちは、この議論に、保育実践への深い理解に基づいて、積極的に参加していくことが求められているだろう。今回の特集では、今まさに子育ての場に身をおく立場からの発信に、耳を傾けていくこととしたい。

子ども理解とは、豊かな可能性を見ること

大宮　勇雄

先日、幼稚園PTAの役員をされている方が「どのお母さんもわが子のことでとても悩んでいるんです。泣きながら子育てしているんです」と話されました。「泣きながら」という強い言葉に深刻さを実感しました。

こうした家庭の嘆きを、わが子に対する期待の裏返しとする見方もあるでしょう。あるいは、実際に「気になる育ち」が増えている実態の反映とする見方もあるでしょう。しかし、わが子の育ちがこれほど否定的に見えていること自体がおかしいのだと思います。問題にすべきは、私たちの子どもの「見方」ではないでしょうか。

今、世界的な注目を集めている保育実践は共通して、子どもたちを「百もの豊かなコトバ」（レッジョ・エミリア）をもった「有能な学び手」（ニュージーランド）であると報告しています。それは、心情主義的な子ども賛美から生まれた飾り言葉ではありません。それらの社会では、ごく自然に、そして誰の目にも、子どもは「力強く、豊かな可能性に富んだ人間」として見えているのです。

なぜ、私たちの社会においては「豊かな可能性」が見えなくなっているのでしょうか。エリオット・アリスナーは、20世紀アメリカ教育の経験から汲むべき苦い教訓として、「教育の目的やスタンダードがより緻密なものになるにつれて、その数が自己増殖しはじめ…（その結果として）教師たちの能力を無力にした」点にあると指摘しています。言い換えると、子どもの発達を諸能力に分解し、年齢や段階ごとに数値化可能な形で細かく目標を設定すればするほど、その行動目標をクリアしたかどうかで子どもの発達を判定・理解できると考えるようになってしまいます。しかしそうすることによって教師たちは、子どもが学び成長する真の姿を理解することを放棄してしまっているのだと言っているのです。また、エリオットは、子どもの発達を理解（アセスメント）する上で、もっとも重要なデータは、「生徒の質問や答えの質、学習における熱中の度合い、人間関係の質」にあるのであり、「テスト（発達のチェックリスト）はみすぼらしい代用品に過ぎない」と断言しています。

発達テストの評点の中にではなく、日々の子どもたちの熱中や質問や人間関係の中にこそ、学びがありその可能性があるとする見方は、レッジョ・エミリアなどの子ども理解に通ずるものです。現在私は、ニュージーランドの「学びの物語」というアセスメント法を使って、「今、ここにある」日々の中に学びをとらえる試みをしています。その結果、実に力強く人間らしい学びの姿が見えてきて、保育者も保護者も子どもの「見方」が一変した、保育が楽しくなったという報告が集まってきています。保育における「成果」の「組織的・体系的な追求」が叫ばれている今、子どもの発達を「できる・できない」で裁断するのではない、新たな子ども理解の方法の開発が求められています。

●*Profile*
大宮　勇雄（おおみや　いさお）
福島大学教授　幼児教育専攻。
主たる研究テーマは保育の質。現在は、質（評価）の中心問題としての子ども理解の方法についてニュージーランドの”learning story”を素材に研究を進めている。その仔細については『学びの物語の保育実践』（ひとなる書房）を参照されたい。

親と育つ・遊びに遊ぶ子ども達と育つ

向山　陽子

執筆中の3月初め、大和郷幼稚園の子ども達は遊びに遊んでいます。特に年長児達は、自らの生活を自分達で作り出し、遊びの中で培われた集中力、協同性などの力を遺憾なく発揮しながら、「卒園」という、未来に向って初めて体験する仲間との別れを複雑な思いで意識しつつ、それでも“今”を“仲間”と存分に遊んでいます。

私は、95人の年長児達が、認め合い、有機的に繋がり合い、遊びの日々を創造する姿に圧倒されています。その姿は、一つの宇宙です。この子達は、巣立った後も、人を信じて協調し、思いやり、興味・関心・意欲を持って自分で毎日を創りだす喜びを仲

間と拡げていくことでしょう。この子達に修了証書を手渡す時、この子達との日々を深く懐かしみながら、この子達を未来に送り出す喜びを味わうことでしょう。そして、この子達を育んできた環境と導いてきた教諭達に敬意を抱かずにはいられません。

近年、幼児教育に世間の関心が向き、幼稚園が初めての学校として位置づけられたことは大変喜ばしいことですが、「幼児の教育のあり方…モノと遊び人と遊ぶ子ども集団の自由感溢れる生活から様々な体験を通して、生きるに必要な心情・意欲・態度を育てる」が、世間に認知されていない様に愕然とする日々でもあります。

私は、三歳の春から六歳の春までの子ども達の育ちを保証する生活を教諭達と共に学び合いながら積み重ね、それぞれの年齢、それぞれの子どもが育ち合う様を、まずは保護者の方々に紹介し、共有し、喜びあえる幼稚園を目指しています。もう一つの故郷として、子ども達の行く末を見続けていこうと思っています。

さて、遊びに遊ぶ六歳の春の姿を見るにつけ、その根底にあって、ここまで育つエネルギーの根源は、次のあたりにこそあると確信するようになりました。

○生命は、生温かく、におって、よだれ・うんち・おしっこ・鼻汁・汗にまみれていること
○ぐちゅぐちゅべちょべちょぬめぬめの感覚、生温かく包まれるような感覚、薄暗く安心して目を閉じる感覚、育つエネルギーが張り湧き立つような感覚など、言葉では上手く表せない原初的な感覚を、体感として居心地が良いと感じられること
○育つとは、土・水・光・火・気・木々・虫・小動物・子ども同士・大人・作る人の思いがこもったモノと、エネルギーを交換すること

自ら育とうとする子ども、自ら遊ぼうとする子どもの傍らに居たい大人ならば誰もが体感する感覚だと思うのですが、この様な感覚を子どもの傍らにいる大人達の中に育てたいと思うのです。育つ力・育てる力が見える大人が増えてほしいから、子ども達の傍にいて笑顔の人がもっともっと増えてほしいと思うから。

さらに、幼稚園という場が、産んだ感覚を体感として呼び起こせる若い(年齢ではなく)母親達を急がせず、まったりと包み込みながら、子どもの育ちを客観視し、互いに生命を慈しみながら、依存と自立を繰り返す子どもに共鳴しながら育つ親達の場でもありたいと思います。

嬉しいことに、登降園時、在園児の幼い弟妹が、手をひかれて、おんぶされて、抱かれて、わんさと一緒に通ってきます。二人の子の親、三人の子の親となり悩みが増えた母親達、父親達と共に育つ幼稚園になれればこんなに喜ばしいことはありません。

●*Profile*
向山　陽子（むかいやま　ようこ）
学校法人大和郷学園大和郷幼稚園園長
お茶の水女子大学・国立音楽大学非常勤講師
幼稚園教諭として子ども達から、子育てした練馬区とアムステルフエーン市で母親達と我が子から、幼稚園長として“幼稚園”創りから学ばせてもらった、乳幼児を育てる遊びの力と親を育てる力について考えています。

子どもと大人の相互主体的学びの追求と文化の生成を目指して

妹尾　正教

今、日本の保育・子育てを取り巻く制度的状況は、霧の中で先が見えないに等しい程、非常に不透明と言わざるを得ない。葛藤を抱えながらも、私たちに出来ることは、今置かれた状況の中、保育をいかに深め子どもにとって実りあるものにしていくかである。この命題を探求していくことが、私たち保育現場の使命である。しかし、私自身は若い頃現場にいる間ずっとモヤモヤしてきた。主体者である「子ども」と「保育者」では向いているベクトルが大きく違っていると感じていたからだ。そして私たちは試行錯誤を繰り返し始めた。

子どもには一人で発見できる能力がある。私たちは「子ども理解」という根源的なことの追求から目を背けてはいないだろうか。子どもを主体とした生活の場と言いながら、子どもの意見を反映せず、子ども不在で語り合い、先回りをしていても主体者たる子どもの自尊心は育たない。多くの保育者は、「子どもの主体性を尊重し寄り添いたい」と頭では理解しながらも、「子どもを陰で操っているのではないか」「枠の中に閉じ込めているのではないか」というジレンマを抱えている。そしていかに解決をしていけばよいのかという具体的方策が見えてこないという葛藤も抱えているのではないか。そこには、指導者を含めた園の保育哲学が問われる。

このような課題を克服していく鍵は、職員集団が地図の中の保育理念という目的地をイメージし、そこに向かう幾つもの方策と、現在地を議論しあうことから始めなければならない。そしてその羅針盤となるのは、子どもの言葉に耳を傾け理解しようとし、様々な可能性を否定しないという行為ではないだろうか。子どもと保育者との関係は、保育者が主導的

に進めるような一方通行の関係ではなく、応答的関係であってほしい。謙虚に関わりを持とうとすればするほど、私たちはその重要性に気づく。そして、「大人の主体性・願い」に委ねるのでもなく、かといって「子どもの主体性・願い」に委ねるのでもない。生活を通し、双方が互いに向き合い、間で揺れながらも、より良い方向性を探る過程で、この時期に必要な経験をさせたいと応答的・相互主体的に織りなすという、朧気ながらも、私たちの目指すべき所が見えてくる。

その道すがら、私たちは日々記録をとり、他の保育者と語り合う中で理論と実践の比較検討を行い、柔軟で創造的な具体的方策を持って子どもに提供し、やりとりをしていくことが求められる。無限の発展性を秘めた子どもに返すべき具体的方策は、人との関わりだけではなく、多様で柔軟で豊かな素材の提供を含む相互発展的な環境が含まれる。保育空間というのは様々な意味で閉鎖されたものではなく、無限の可能性を秘めた遊びの空間であってほしいのだ。さらに、生活の中で空間をより豊かなものにするには、保育者だけではなく家庭や地域が日常的に関わることの出来る仕組みを作ることであり、そのツールとして、子どもの学びのプロセスの記録の整理、開示・共有化を図ることが大切なのではないか。保育者が、記録をまとめ、語り合うということは、子どもの内面を探りつつ保育者自身を振り返る事であり、子どもや自身の内面と向き合う事になる。そこに他の保育士や保護者、地域が日常的に関わり、多面的に語り合うことにより、保育の意味を探求し深めるという面白みが芽生え、推進力となっていく。そうした、子どもを中心とした文化の生成こそが大切なのだ。

保育とは常に試行錯誤の連続であり、結果の見えない終わりのない旅のようなものだが、子どもの自発性や興味関心を尊重した生活を大切にし、大人が子どもと共に相互主体的、協同的、創造的に保育を探求し続ける文化を生成していくことが、保育を深め実りあるものとするために求められていることなのだと私は思う。

●*Profile*
妹尾　正教（せのお　まさのり）
社会福祉法人仁慈保幼園 理事長、仁慈保幼園 園長
関心を持っていること
子どもと大人の相互主体的学びの追求と文化の生成

今子育て支援に必要なこと
－つながりと共通の願いの中で－

新澤　拓治

私は支援者として、子育てのひろばから虐待の対応など、様々な子育て・子ども支援に関わりをもってきましたので支援者の立場として必要なことを考えてみたいと思います。

子どもたちや子育てを取り巻く状況をみていると、ありとあらゆるものが必要だという思いが率直な所です。安心して遊べる場所、子育てに不安を抱えている時に相談に乗ってくれる人、子どもを保育してもらいたい時の受入れ先、気持ちを受け止めてくれる大人、経済的な支援、市民同士の支え合い、当事者のエンパワー、等々列挙にいとまがありません。

少子化対策といった視点がスタートではありますが、そうした状況を受け、子育て支援のサービスも国を挙げて充実させる方向での取組みがなされている所です。しかしながら待機児童対策に見られるように、地域における課題の偏りや、受入れ数を増やしてもさらに輪をかけるように希望者が増えるといった現象など、単純に数が増えればよいということではない事にも気づかされます。

一方私たち現場の支援者は、なるべくニーズに応えるような働きをしたいと懸命に取組み、葛藤を伴いながらも様々な活動の展開をしてきました。以前あるケースワークで、夜間に子どもを置いて仕事をしている父子家庭の父親と話をしたことがありました。「何とか子どもを一人にしないでおくことは出来ないか」と問う私に、その父親は「だれか子どもを預かってくれるのか？あなたが昼間の仕事を紹介してくれるのか？どうなんだ？」と詰め寄ってきました。その悲痛とも言える叫びに、当時夜間の預かりやサポートの制度がなく、何も応えられない自分は沈黙するしかないということがありました。目の前に困っている人がいたら何とかしたいと思う心。そのことは福祉に携わるものとしていつも根底にあることなのだと思います。

しかしながら、今子育て支援の最前線で考えることは、これだけの行政サービスの展開、施設数の増加、地域におけるボランティアやNPO活動の隆盛、学問的な子育て支援へのアプローチがありながら、それぞれの思いや、担うべきもの、目指しているものがはっきりとしていない、また中には軋みを生じたり齟齬をきたしていることすらあります。これだけの広がりや幅が出てきた今、今一度子育ての支援

を整理し、とらえなおす作業をしながら、共通の目的や、意識を醸成していくことが必要なのではないかと思います。

例えば要保護児童の対策と予防的な活動はどちらが重要であるか、といったことは議論するようなことではなく、当然どちらも大切であると言えることですが、施設や事業、制度が足りていない要保護児童対策と共に、評価されにくい予防的活動をどう位置付けるのか、このことは大きな問題です。実際に行なわれた対応は件数として挙げやすいですが、予防的な活動は数量的な表現が難しく、これは子育て支援の質を語るのと同じように難しい問題で、現場からみると研究者の方々にもご尽力いただき、今自分たちが行っている活動についての後ろ盾、後押しをしていただきたいと期待している所であります。

生まれてから成人するまで、予防から対処まで、それぞれの時期、それぞれの役割、すべてが必要で、それぞれに意味があるということを一緒に考えていけたらと願い、今年になって政府が打ち出した新しい大綱「子ども・子育てビジョン」のトップを飾る「子どもが主人公（チルドレン・ファースト）」という言葉がお題目とならないよう、研究者や現場といった枠を越えて日本保育学会でも活発な議論が展開されていくことを期待しています。

●*Profile*
新澤　拓治（しんざわ　たくじ）
練馬区立光が丘子ども家庭支援センター 所長
現在は子育ての総合相談・子育てひろば・一時的保育・トワイライトステイ・ファミリーサポート事業等に取り組んでいます。保育士時代を含め様々な境遇の子ども達と接する中、子どもたちの幸せ、平等とは何だろうといつも考えています。

今子育ての場で求められているもの －母親の立場から－

堂本　真実子

「今子育ての場で求められていること」について、母親の立場から、私が経験した幼稚園入園前後の局面を通して考えてみたい。

私は、大学の非常勤講師をしながら就園前の子ども二人と約4年間、ほぼ毎日近くの公園に通い続けた。このことについては別の場で論文として発表したが、乳幼児をもつ在宅育児の母親にとって、家庭以外の日常的な子育ての場をもつことは切実に必要である。在宅育児では、子育ての時間は豊富にあっても、そこで社会に開かれた時間は非常に少ない。このことが大きな閉塞感を生む。

公園は、何より子どもが他の子どもと戸外で身体を動かして遊べる場である。母親は、決められた時間に縛られることなく、自分のペースで関わっていくことができる。「公園デビュー」という言葉からは、よくマイナスのイメージが誘発されるが、実際は基本的にみな常識的である。行くも行かないも自分次第というところから、その場に居続けるための節度が生まれ、子どものために、自分のために、この関係を維持したいという気持ちからさまざまな配慮が生まれる。こうして自らが主体的にかかわり、いくつもの関係を積み重ねていく中で集団が形成され、一人ひとりの内に一員としてのアイデンティティが育まれる。井戸端会議は、母親の単なる気晴らしではない。それ以上のれっきとした社会活動である。

しかし、自然発生的な集団が集団として意識され、維持されるまでには、いくつかのめぐり合わせが必要であることも事実であり、そう簡単なことではない。その意味では、公園に母親たちが通いたくなるような環境の整備、母親と母親をつなぐ何かしらの存在が必要となるだろう。これは、今ある公園をどう方向づけ、どのように再生するかという問題にかかわっている。

また、私が出会った多くの母親たちを見ていて感じることは、自己実現の方向として、母親としてのアイデンティティを深め子育ての場で何かの役に立ちたいと考える人と、仕事と育児の双方にアイデンティティをおいていこうとするタイプの人がいるということである。これは、子どもが幼稚園に通うようになって、ある程度の時間ができると顕著に現れる傾向である。これに対し、前者には社会的な活躍の場がなく、後者には両立する環境が乏しい。

前者は子育て支援としては、大きな潜在力である。PTA活動のような内容が決まったものの他に、それぞれの特技や特性を生かした活動の仕方があれば、子育ての場の大きな力となるだろう。

また後者の場合は、現状では子育てとのバランスを考えて、パートで働くことを望む人が多い。しかし一時的に子どもを預ける場所がないし、預けたとしても、その費用が給料を上回ることが多々ある。せめて、幼稚園の長期休暇には預かり保育を実施すべきである。

こうして考えると、子育ての場というのは子どもの年齢や母親の状況によって多岐にわたり、そこで求められるものが違ってくるということが言える。常勤で働く母親の場合は、子どもとの絆を育む日常的な時間がなさ過ぎる。私の友人たちが、仕事と育児に心を引き裂かれている様子を見るのは、とても

つらい。こうしたそれぞれの局面に、現行の子育て支援は応えているだろうか。

総じていえることは、どのような場合であっても、日常的な生活のなかで母親が子どもとの絆を育みながら、いかにして社会にひらかれていくかということである。子育て支援としてのさまざまな資源は、そこに充てられていくべきだということが言えるだろう。

●*Profile*
堂本　真実子（どうもと　まみこ）
所属：若草幼稚園
研究テーマ：これまで、子どもの笑い、公園における母親の人間関係、そして、保育者の実践における思考の在り方についてブルデューの「実践感覚」やH. ウルリッヒらの「全体的思考」から研究してきた。現在は、子どもの遊びにおける「気ままさ」について関心を持ち、アプローチしている。